

1979 年。

井上喜久男「継体天皇外構柵設置区域の調査」『書陵部紀要』第 31 号、宮内庁書陵部、1980 年。

(3) 福尾正彦「三嶋藍野陵見張所改修区域の調査」『書陵部紀要』第 37 号、宮内庁書陵部、1986 年。

徳田誠志「三嶋藍野陵見張所下水道管理設箇所の立会調査」『書陵部紀要』第 49 号、宮内庁書陵部、1998 年。

(4) 前掲註(2)、笠野報文。

(5) 「継体天皇 三嶋藍野陵図」宮内庁書陵部陵墓課編『宮内庁書陵部 陵墓地形図集成』、学生社、1999 年。

(6) 前掲註(1)に同じ。

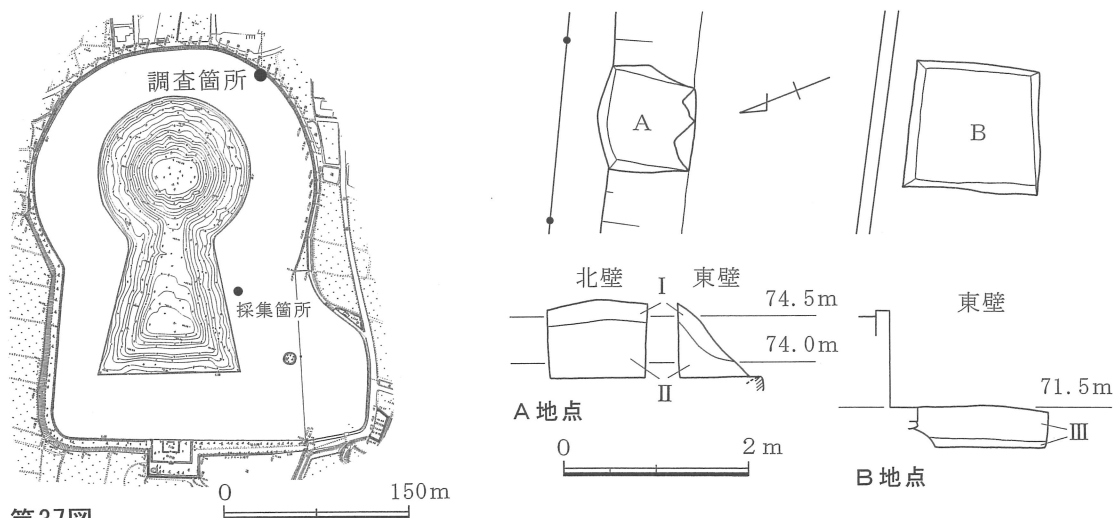
垂仁天皇 菅原伏見東陵樋門改修その他工事箇所の立会調査

本陵は、奈良市尼辻西町にあり、前方部を南に向ける前方後円墳である。広い鍵穴形の周濠をもつことで著名であるが、外堤の北東に位置する樋門を改修することになったため、平成 15 年 12 月 11 日から 14 日の間、本部職員と畝傍陵墓監区事務所職員により立会調査を行った。

調査箇所は 3 箇所、外堤上に 1 箇所 (A)、濠底面に 2 箇所 (B・C) であるが、C 地点は土留板設置のため、図化できず現地観察のみである (第 37 図)。A 地点は、外堤の既設石積上にあたり、掘削範囲も表土 (I) と現外堤盛土内 (II) にとどまる。B 地点は濠底であるが、既設コンクリート擁壁に接しており、土層も擁壁設置後の濠内堆積土 (III) であることを示している。C 地点は壁面崩壊の危険があったため、土留板を設置しており、隙間を利用して観察した。確認できた土層は過去の工事の埋め戻し土である可能性が高い。遺構・遺物は検出されなかった。

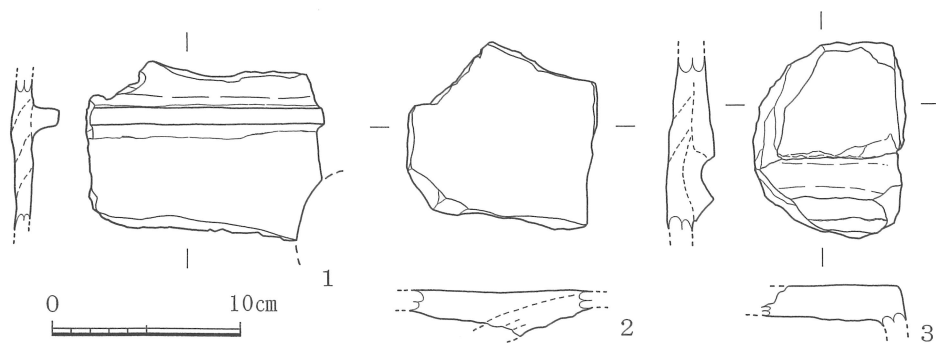
上記の結果を踏まえ、工事は予定通り実施した。

なお、墳丘裾巡回中に埴輪片 12 点を採集した。しかし、濠水に浸かっていたため摩滅しており、大半は調整が不明である。提示できる情報は少ないが、これらのうち比較的形状の判明する 3 点を図化し、報告しておきたい (第 38 図)。埴輪は墳丘裾の各所に散見されるが、前方部東側面と



第37図

菅原伏見東陵 調査箇所位置図 (1/3000) および 調査箇所平面図・断面図 (1/80)



第38図 菅原伏見東陵 採集品実測図 (1/4)

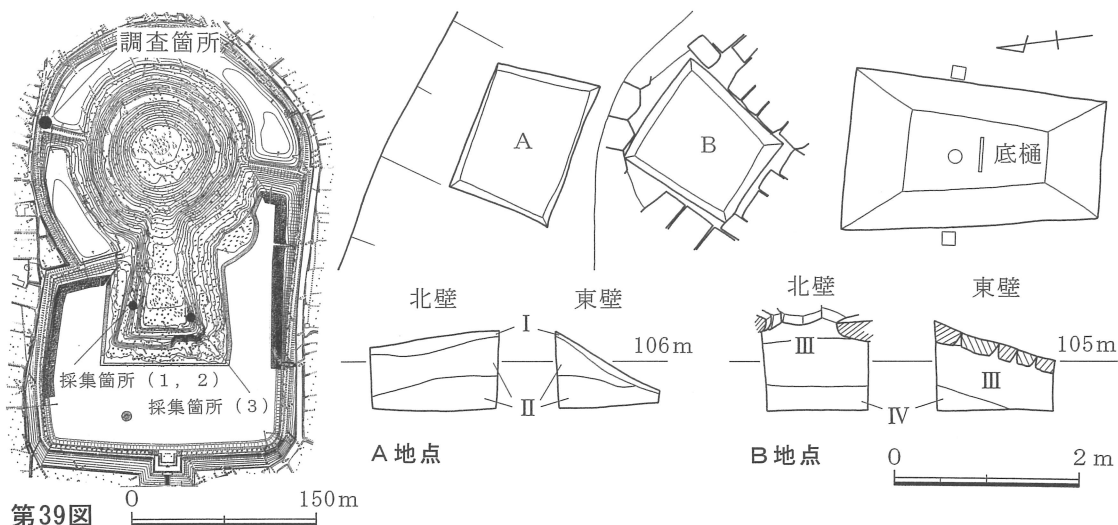
西側面において比較的顕著に認められた。図化したものは、前方部東側面墳丘裾で採集したものである。1は円筒埴輪片である。突帯は比較的幅広く、胴部には円形透孔が確認できる。2は盾形埴輪の盾面部の破片である。円筒部から剥離した箇所にあたる。盾面には線刻で文様が施されていたと考えられるが、現状では確認できない。3は形象埴輪の破片である。剥離や摩滅がひどく、文様や調整は不明である。横断面をみるとわかるように、端は屈曲しており、角部分に相当することがわかる。家形埴輪か甗形埴輪の一部であろう。(清喜裕二)

崇神天皇 山辺道勾岡上陵樋門改修その他工事箇所の立会調査

本陵は、奈良県天理市柳本町にあり、前方部を西に向ける前方後円墳である。後円部北渡土堤と外堤の接続部に設けられた樋門を改修することになったため、平成15年12月15日から17日の間、本部職員と畝傍陵墓監区事務所職員により立会調査を行った。

調査箇所は2箇所(A・B)、ともに外堤斜面に設定した(第39図)。土層は2箇所それぞれ2層に分けられた。A地点では表土(I)と現外堤盛土(II)、B地点では石積基礎の栗石層(III)と外堤盛土(IV)が確認された。現外堤盛土であるII層と、IV層の関係は不明で、IV層からも時期を知る資料は得られなかった。遺構・遺物は検出されなかった。

上記の結果を踏まえ、工事は予定通り実施した。



第39図 山辺道勾岡上陵 調査箇所位置図 (1/3000) および 調査箇所平面図・断面図 (1/80)